

令和7自己評価書及び学校関係者評価書

令和8年 3月 2日
札幌市立北の沢小学校

1 本年度の重点目標

幸せ感じる学校～<学び・心と体の支え>あいあふれる子の育成～

2 本年度の経営方針～重点目標の具現に向けて

学ぶ力の育成	・課題単級的な学習の充実・個別最適・協働的な学びの〈一体的な〉充実・ICTの効果的な活用・基礎学力・学習習慣づくり
豊かな心の育成	・道徳教育の充実・自治的な活動の促進・豊かな感性・社会性を育む活動の充実・言葉を大切に生活
健やかな身体の育成	・体育の授業の充実・体を動かす機会の創出・健康教育の充実・安全教育の充実

	評価項目	重点	評価	達成状況	次年度育成プログラムに向けての改善策	学校関係者評価		
						自己評価の適切さ	改善策の適切さ	
学ぶ力 育成プログラム	子どもたちは、課題探究学習において、課題と見直しをもって、自ら学習を進めていたか。	◎板書とノートの連動 ◎各学級の実践の共有（学びLabo） ・部からの授業研修の方向性の発信 ・考えを表現する力を高める	A	●板書とノートの連動による学習に向かう姿勢の定着が見られた。板書への課題とまとめの位置付けに取り組んだことと、学級ごとの「ノート指導」の取組が相まって、子どもの課題を意識して授業に参加する意識が高まった。	1. 学ぶ力 ◎自発的な問いを生む「イントロダクション」や自力解決につながる見通しのもち方の工夫を模索する。	A	A	
	子どもたちは、課題探究学習において、多様な考えに触れ、自分の考えを見直しながら、課題を追求していたか。		B	●学習の振り返りを意識することで、子どもが学びの積み上げを実感し、「自分にはよいところがある。」という自己肯定感や達成感を感じる授業を目指した。一方で「粘り強く取り組む環境、学習展開、支援」の必要性が明らかとなった。	○板書とノートの連動による思考の言語化や深化、学びの定着と振り返りの習慣化を目指し、同時に粘り強くより組む学びの姿勢の定着を目指す。	A	A	
	子どもたちは、課題探究学習において、学習を振り返り、学んだことよさや自分の成長を実感していたか。		A		○課題と見直しをもってICT機器活用できるような授業が構築されることが不可欠である。	A	A	
	子どもたちは、ICT機器を学習用具として使いこなし、自らの学習に役立てていたか。	・学年の発達段階に応じたキーボード入力の習熟（慣れる→メモ→考えを表現する）	B	●キーボード入力の習熟を目指してタイピングアプリの取組を奨励し、3学期から全校ランキングの掲示を始めた。全校的にキーボード入力の習熟は進んでいる。また学習でICT機器を使用する場面を子ども自身で判断する姿も増えた。 ●学習内での効果的な活用という点において、タイピングはICT機器を自由に操作する手段の向上と言える。	◎朝活動の読書の時間を確保し、語彙力や文章の組み立てを自然と学ぶ機会としたい。それによって、文字を書くことへの抵抗感を減じ、文章を書く力、そして表出していく力の育成へとつなげる。そのために札幌市独自システムである寄託図書の利用や、読み聞かせ、学級文庫の整備などの読書環境の向上を目指す。 ○学習習慣の定着については家庭との連携も不可欠である。学校として家庭に方針を示し続けていく。	A	A	
	子どもたちは、朝活動や家庭学習（宿題）などを通して、基礎学力が定着したり、よりよい学習習慣が身に付いたりしたか。	○各学級の継続した取組 ○宿題・家庭学習等の取組の見直し	A	●ドリルアプリに加え、手を動かして書く、活字を読むなどのアナログ的な取組も行われたことで、定着してきている。 ●宿題と家庭学習について方向性を出すことができた。	○朝活動や授業とのつながりについては、教職員で共通のイメージをもって進めていく。 ○子どもの目と手の届くところに本を配することによって、活字に触れる機会を増やしていく。	A	A	
豊かな心 育成プログラム	子どもたちは、「考え、議論する道徳の授業」を通して、道徳的価値について考え、自分の生活を見つめ直していたか。	・自分ごととして捉える課題や発問 ・生活の見直しにつながる振り返り	A	●道徳の学習で各学年に応じた振り返りカードに年間を通して取り組んだことで、考え方や学び方を身に付けることができた。	2. 豊かな心 ◎自分ごととして見つめ直す事ができるような課題や発問の仕方について課題が残ったので、学ぶ力育成部の研修と連携し発問や振り返りについて学級経営交流会の場で実践の交流を重ね、学校生活全てを通じて取り組んでいく。	A	A	
	子どもたちは、学級・委員会活動や総合的な学習などの自治的な活動を通して、自分たちで考え、より良い生活を追求していたか。	○自治的な活動の交流と情報共有	A	●職員による学級経営交流会で自治的な活動を目的とした係活動の情報共有を行ったことで、後期の活動に生かすことができた。	○相手意識をもった人間関係を形成していくために言葉遣いのあり方や規範意識の徹底を推進していく。	A	A	
	子どもたちは、文化や芸術、地域のよさを感じる活動、奉仕的活動を通して、豊かな感性や社会性を身に付けたか。	・「ふるさと札幌・北の沢」をキーワードに、地域のよさを実感する活動等の継続	B	●「ふるさと北の沢・札幌のよさ」→生活・総合的な学習・校外学習・出前授業で地域の良さや芸術文化に触れられるような学習計画を継続していくことが大切である。	○行事や月曜日が祝日となることとの兼ね合いで委員会活動の間が空きすぎないように日程調整をし、まとまった取組ができるようにしていく。	A	A	
	子どもたちは、行事や異学年との活動などを通して、所属感を持ち、規律を守り、人と関わるよさを味わっていたか。	◎「ふれあい活動」の事前指導の充実と振り返りの積み上げ	A	●異学年交流である「ふれあい活動」では各学級での事前指導が充実していたこともあり、相手意識をもって取り組むことができた。 ●運動会や音楽発表会を通してそれぞれの学年のよさを実感し、感想カードなどで交流することができた。 ●友達のよさを学校全体に発信する「ふわふわカード」によって、あたたかい言葉や行動の価値付けができた。	○地域の方との関わりなどを取り入れて、自分の住む地域を大切に思う気持ちを育てていく機会を模索していく。 ◎「ふわふわカード」を掲示するだけではなく、全校集会で紹介するなどして「よい言葉」を広げていく関わりをしていく。	A	A	
健やかな体 育成プログラム	子どもたちは、体育年間カリキュラムに基づき、「運動ドリル」を積極的に活用することで、様々な運動に慣れ親しみ、体力を高めていたか。	◎運動ドリルの周知徹底 ◎ミニ研修の実施	A	●ミニ研修…校長による短距離走やスキーマの指導が効果的だった。次年度も、各職員がもつ専門的な指導法について積極的な研修を試みる。	3. 健やかな体 ◎年間カリキュラムの周知や、本校独自の運動ドリル（体育の学習で使用する視覚教材等によるもの）について時期に応じて取り組む種目を明確にし、確実に取組み、運動能力や体力を高める。	A	A	
	子どもたちは、ICTを効果的に活用し、課題探究的な学習を進めることで、体を動かす楽しさや喜びを味わっていたか。	・実践交流や研修	B	●部で準備したマットや跳び箱でのICT活用が有効であった。	○体育の学習において子どもが課題意識をもって学習に臨む契機となるICTの活用について実践交流、研修を推進する。	A	A	
	子どもたちは、「運動したくなる」環境づくりや外遊びの励行等により、休み時間等で進んで体を動かしていたか。	○すこやかデーを月2回実施する	A	●「すこやかデー」の日は、放送で全校に呼び掛け、グラウンドで元気に過ごす姿が見られた。豊富な遊具によって一輪車竹馬に挑戦する子どもが増えた。	○運動の励行や運動環境の整備及び健康・食指導の実施等を通し、子どもたちの健やかな体づくりに対する意識を高める。	A	A	
	子どもたちは、自分を見つめ、他者と関わり、自分に問いかけることで、自らの健康づくりに対する意識を高めていたか。	・自身の体づくりに対する意識を高める	B	●毎日の給食指導や食育放送、お便りによる健康指導、食指導については充実していた。	○遊びから体を動かすことの楽しさを味わうことができるように指導する。	A	A	
	子どもたちは、事故や災害等の危険を理解した上で、自ら適切に判断し、主体的に行動できる資質や能力を育てていたか。	・時期等に応じた安全指導の実施	A	●毎月の安全デーにおいて重点を絞った指導を継続し、児童が普段の生活においてより主体的に安全な行動を行えるよう意識付けができた。		A	A	
不登校・支援	子どもたちは、特性や不登校などの状況に応じた学習支援や家庭・専門機関との連携等により、学びを進めたり、登校へつながりやすくなったか。	・スピード感ある対応と情報共有の両立	A	【不登校児童支援】 ●担任が長期欠席になりそうな子どもに対して、すぐに連絡をすることで安心感を与えることができた。 ●「放課後登校デー」の設定により、家庭や子どもへの関わりを継続できた。	◎相談支援パートナーに不登校未然防止としての対応を中心に子どもに関わってもらっているが、別室での学習支援なども試行していきたい。 ◎ICT活用等による学びの保障や、組織として繋がりを絶やさない体制を確立していく。	A	A	
		・担任一人で抱え込まない学校の体制づくりの構築 ・相談支援パートナーとの協力 ・別室登校によるきっかけづくり	A	●学校以外で過ごすことを選択するという実態に対し登校再開のみを成果とせず、行事や特別授業などのお知らせで、少しずつ登校が増えてきている子どもも一定数見られるようになった。		A	A	
いじめ	いじめの未然防止対策に努め、早期発見、早期対応等を適切に実施していたか。	◎いじめ防止対策から ・基本的な考え方の共有 ・未然防止等の取組 ・早期発見、早期対応 ・ネット上のいじめへの対応 ・組織としての情報共有や対応 ◎シャボテンログやアンケート活用 ◎いじめ防止対策委員会	A	●いじめ防止対策委員会を通じて、いじめについてだけでなく、子どもの情報について共有することができ、たくさんの目で子どもを見守ることができた。 ●シャボテンログで確認した子どもたちの心身の状況をチャットですぐに担任に知らせることができ、細やかに対応できた。	◎SCによる研修を生かして、悩みやいじめに関するアンケートや学校生活の中での問題に対して、組織として迅速かつ丁寧に関わりを持って子どもの指導に活用していく。	A	A	
その他	働き方改革に向けての取組はなされていたか。	・出勤システム管理 ・副担任制	B	●在校時間が過多にならないよう、声掛けをしたり一人で抱え込まないようにする職員同士の協働が見られる。	◎校務端末のシステムが大幅に変更になり、全職員が慣れるまでは従来通りのスケジュールではなく、余裕をもった働き方が求められる。 ○一人の子どもについて複数で語る事ができる教職員集団を目指す。	A	A	
学校関係者評価者による意見		<ul style="list-style-type: none"> ・少人数の学校であるからこそ、教師の目が行き届き、その利点が生かされている。 ・副担任制や学級経営交流会など、教職員が少ない中でも連携して、明らかになっていく課題に向き合っている。 ・不登校、いじめは全ての学校の大きな課題であり、誰もが楽しい学校づくりを目指し、発達支持的な丁寧で粘り強い支援が必要。 ・不登校については、自宅で学習することも可能ではあるものの、集団で学ぶことのよさが不登校解消に繋がるとよい。 ・幼保小、小中の連携を深め、保護者や児童が安心して次のステップに進めるように、家庭と連動していく必要がある。 ・CSや小中一貫した教育での9年間の学びの連続性の観点から、小学校実践を中学校と共有していく工夫があるとよい。 ・高校の美術部と連携したグラウンドの壁画制作や、ナショナルデモンストレータや校長による指導・大学生ボランティアを活用したスキー学習など、地域の特色や外部人材の専門性を取り入れた教育活動が展開されている。 						